

## 令和3年度 第1回 沖縄県SDGsアドバイザーボード会議 議事概要

日時：2021年8月12日（金）15:00～16:30

場所：沖縄県庁 ほか（オンライン会議）

出席者：

（委員）

蟹江委員、北村委員、佐野委員、島袋委員、玉城委員、平本委員、  
淵辺委員、和田委員

（沖縄県）

玉城知事、島袋政策調整監、島津SDGs推進室長、SDGs推進室 平良主幹

（事務局）

「令和3年度 第1回 SDGsアドバイザーボード」を開会する。

- ・配布資料の確認
- ・発言方法の説明

開催にあたり、知事よりご挨拶を申し上げます。

（知事）

令和3年1月に提出されたSDGsに関する万国津梁会議の最終提言を踏まえ、本県のSDGs推進に対し専門的な観点から意見や助言をいただくことを目的に設置された。蟹江委員・佐野委員・島袋委員・玉城委員・平本委員には昨年度に充実した内容の最終提言をまとめて頂きありがとうございました。引き続き、本アドバイザーボードにおいて国内外の先進的な取り組みや動向などを専門の分野から幅広い助言を頂きたい。また北村委員・淵辺委員・和田委員、就任ご快諾ありがとうございます。専門的な立場から新しい風を吹き込んでSDGsが沖縄県で広まっていくようご提言お願いしたい。

沖縄県では沖縄らしいSDGsの基本理念「平和を求めて時代を切り開き世界と交流し共に支え合い誰一人取り残さない持続可能な美ら島沖縄の実現」とした。今後その実現に向け県民一人一人が参画者となるような様々な取り組みの一層の推進を目指すとともに県民・企業・各種団体など多様なステークホルダーが主体的にその役割を担うことができる包摂性のある沖縄らしいSDGsの推進体制が構築されるよう取り組んでいく。

沖縄県SDGs実施指針素案や沖縄SDGsアクションプラン（仮称）の策定方法について忌憚のない意見・助言を頂きたい。

（事務局）

各委員を紹介、各委員から挨拶 ※委員紹介は五十音順

(蟹江委員)

昨年の万国津梁会議に引き続き参加することになった。去年までの議論で今後進めていく基盤はできている。今回から沖縄でSDGsは非常に大事な考え方、誰一人取り残さないで発展していく良いコンセプトがたくさんつまっている。先進的なSDGs推進地域となって頂けるようにお手伝いしていきたい。

(北村委員)

ローカルとグローバルをどうつなげていくかがSDGsの課題。沖縄で起こっていることは沖縄特有の問題もあるし、世界と共通な問題もある。それらを繋げながら沖縄らしいSDGsを考えていけるといって嬉しくありがたい機会。教育学者として子どもたちが世界で起こっている課題をいかに自分ごととしてとらえ、将来沖縄で活躍していく。あるいは沖縄の外に出ていって活躍していく時にルーツとしての沖縄を大事に思いながら育ていけるような教育面での議論もしていきたい。

(佐野委員)

今年1月末までJICAの沖縄センター所長として万国津梁会議や県振興審議会専門部会に参加していた。2月に着任した経済開発部では開発途上国の経済成長を支援するために農業・畜産・水産分野での協力や途上国の民間セクターの振興に関すること、観光セクターでの協力などを行っている。沖縄のみなさんにも沖縄の知見を活かし、様々なプロジェクトで協力していただいている。沖縄のSDGs推進の取り組みが県内だけでなく世界を変えていく、世界に貢献するものになっていくよう、このアドバイザリーボードで議論していきたい。

(島袋委員)

専門は行政学・地方自治分野で、特に沖縄振興の問題をスコットランドなどとの比較研究をしてきた。SDGsは行政学の分野で言えば政策のマネジメントサイクル、ある特定の価値を実現するために進捗状況を管理しながら進めていくやり方に非常に似ていて、そこで私の専門性を活かせればと思っている。SDGsでは、人権と環境の価値の実現を国際的な基準にあわせていくのも非常に重要。とくに沖縄では子どもの権利条約に関連する人権・子供の貧困・基地問題など様々な人権侵害が生じている。それを国際的な基準で解決していこうという問題意識をもって参加している。

(玉城委員)

専門は開発学で国際協力、最近SDGsプロジェクトに学内で取り組んでいる。県では2年間でパートナーが200団体に増え、学校教育では研究指定校もできた。何よりも嬉しいのは県のSDGs室長が島津室長となり女性、また委員も男女半々となった。玉城知事へお礼申し上げる。実施指針・素案をアクションプランに発展

し、県内外の声を生かしながら進めていきたい。

(平本委員)

これまでの万国津梁会議では十分に非常に活発な議論をもとに案をまとめることができた。セクターをこえた連携としてパートナーの取り組みが始まり、学校教育の中にSDGsを位置付けることが成果としてでてきた。一方で離島を十分に巻き込んでアプローチしていくなど、まだまだ課題としてやり残してきたところがある。これから丁寧に一緒にアプローチしていければと思っている。

(淵辺委員)

来年からはじまる新しい振興計画に対する提言書を作成した。SDGsも入れ込んでいる。「沖縄経済同友会持続可能な開発目標を支援しています」と書き込んである。首里城再建のバッジを作成、17色を入れ込んでいる。これから世界に対してどう動けるか動かせるか。沖縄経済同友会には研究委員会があり、今年度からSDGs委員会も立ち上げた。企業が取り組むべきことやその方法、これから勉強していかなくてはと思っている。一緒にいろいろお話し・勉強をしながら佐野さんがおっしゃった世界に貢献できるようなものにしていきたい。

(和田委員)

ユースの立場からSDGs-SWYという団体でSDGsを推進する活動をしているほか、大和総研で経済・金融の研究員をしており、最近では脱炭素化による経済への影響等も研究している。また、実は蟹江先生の教え子であり、2015年からSDGsを勉強・活動している。学生時代に読谷村でSDGsをローカライズする活動に取り組んだ縁もあり、沖縄県に関わることができて嬉しい。このような委員会には初めて参加するが、万国津梁会議の熱い議論を拝見し、今回の議論を楽しみにしている。沖縄県において若者のSDGs意識を高め、ユースとしてこれを活かしながら少しでも達成できるような貢献をしたい。

(事務局)

沖縄県SDGsアドバイザーボード設置要項第4条第1項の規程により委員の互選により選出することになっている。自薦又は他薦はあるか。

(佐野委員より)

座長については以下の理由から玉城直美先生を推薦する。

- ・ 沖縄県内でSDGsの理解促進・普及に関し著しい活動実績がある。
- ・ 活動状況がたびたび新聞記事にもなり、県内でも著名な有識者である。
- ・ (ご所属の) 大学だけでなく高校・中学校などの教育現場、企業や市町村等自治体などに対し、研修・ワークショップを実施し、ひとりひとりがSDGsの意味・重要性を理解して行動できるよう活動を行っている。

- ・ラジオ番組でも活躍しており、沖縄県におけるSDGsの広報部長とも言える。
- ・実績が十分な上、一般的にこのような会議の座長は年長者や男性が選ばれがちであるが、玉城先生が選出されることはSDGsの本質を体現するものと考えられる。若い世代や女性、特に沖縄の課題である子どもの貧困などの課題を抱える母親層への一つのメッセージになりえる。

(事務局)

佐野委員より玉城委員の推薦があるが如何か。

(全委員賛成)

(事務局)

玉城先生に座長をお願いすることとする。

(玉城座長)

- ・光栄で言葉を失うほど素敵な言葉をいただいた。
- ・まだまだ未熟であるが、リーダーシップというよりみなさんの意見を頂き、また県内で頑張っている女性や若者の声を代弁できるように努力を重ねていく。

(事務局)

SDGsアドバイザーリーボード設置要項第4条第3項に基づき、座長の代理を務めるものとして、副座長の選出を座長に指名いただくこととなっている。玉城座長に副座長を指名いただきたい。

(玉城座長)

昨年の万国津梁会議でも貴重な情報をいただき、支えとなった蟹江先生にお願いしたい。

(蟹江委員)

承諾する。一度関わった沖縄県のSDGs、座長を支えながらうまく進むように貢献したい。(万国津梁会議の座長をつとめた)島袋先生も今年も参加されているし、みんなで力を合わせていくのがSDGsらしくて良い。玉城さんは前回も取り残されがちの人々の目線を非常に大事にされている印象が残っている。その知見でみんなを引っ張って行ってほしい。

(事務局)

以後の議事進行を玉城座長をお願いする。

(玉城座長)

事務局から資料の説明を求める。

(事務局)

事前に全委員へ資料を配布していることから、議論に時間を使って頂く為、ポイントをしぼって説明する。

議事は以下の3つとなっている。

- (1) 沖縄県の取り組み報告
- (2) 実施指針の素案について
- (3) アクションプランの策定作業について

(1) 沖縄県の取り組み報告 ※スライド3枚目より

SDGsに関する万国津梁会議において、令和3年1月に最終提言が取りまとめられた。これをもとに沖縄県で様々な取り組みを展開しており、その報告をさせていただく。基本理念、12の優先課題については2月に推進本部を開催、沖縄県の推進方針に反映する、10年計画の新たな振興計画の素案にも反映させた。推進体制も最終提言で頂いた中のアドバイザリーボードが本日立ち上がった。専門部会は今後ステークホルダー会議として立ち上げていく。順次提言を実現すべく進めている。

全庁体制の推進という観点で「SDGs推進リーダー」を玉城知事の強いリーダーシップのもと設置。県庁の全ての課と各出先機関から担当者1人を配置。190名という大所帯になったがリーダーを活用しながら全庁的な展開を進めている。セミナー等に講師派遣をする県職員のSDGsマスターズという制度も作り普及啓発へ取り組んでいる。

さらに、具体的な取組を説明する。

沖縄SDGsパートナー登録制度については、非常に好評で申請が増えており県内企業間で機運が高まっているのを感じる。200団体登録済み。パートナー企業の情報交換や交流を進めていくためオンラインで意見交換や説明会を開催したりしている。市町村からも連携や意見交換したいという声もあり新たな枠組みを考えていく。この制度は今年度まででいったん区切り、来年度以降について見直しを踏まえてアンケート調査の準備を進めている。

市町村と連携については、県内全ての41市町村との連携のため連絡会議を設置。沖縄5県域ごとにオンライン意見交換会、7月には全体会議も開催。SDGs未来都市に指定していされている恩納村・石垣市との3団体の連携会議の設置も合意しているが現在はスケジュールが合わず個別に意見交換を行っている。

県外の自治体との連携については、積極的に取り組むこととしており、長野県・滋賀県と意見交換会を定期開催予定。順次拡大していく予定。

普及啓発の取り組みについては、昨年度ポータルサイトを開設している。県職員のマスターズ登録、セミナーに出前講座として講師派遣して普及啓発に努めている。マスターズの研修も充実していきたく委員の意見も聞きたい。その延長線として、市町村研修もニーズが高く、講師派遣等を充実させていきたい。

教育分野においては、昨年11月に万国津梁会議による「教育分野に関する意見書」が提出された。教育庁でも積極的に取り組みを進めていてSDGs達成に向けた教育実践指定校が9校指定され、小中高と特別支援学校でも展開されている。教員向けの研修も玉城先生に講師をご担当頂くなど、充実してきている。教材開発も始まっている。

若い方の意見を取り入れていくため、高校・大学・専門学生を対象とした「アイディアコンテスト」を実施予定である。

（一時的にポータルサイトに画面共有を切り替え）

ポータルサイトについて概要を紹介する。トピックスでは実施指針（素案）のパブリックコメントの案内や具体的なプロジェクトのプレスリリースも展開。現在、赤土防止プロジェクトとしてTVCM/ラジオCMに関する情報を掲載している。おきなわSDGsパートナーについては、全てのパートナー企業・団体の情報を掲載していく予定。例として掲載企業2団体を紹介。

（会議資料に戻る）

認知度調査の結果については、万国津梁会議の中で認知度調査のあり方について意見をいただいて進めた。報告書はHPにて公表、必要に応じて資料の提供も可能である。

SDGs未来都市については、今年5月に選定され県内の機運がさらに高まった。万国津梁会議の最終提言を踏まえた具体的な取り組みを提案書としてまとめ、応募した結果、選定された。最終提言はいろいろな方面で展開が広がっている。経済・社会・環境に三側面に対応し、既存の県の事業を整理している。沖縄県SDGs未来都市計画については別紙資料として共有しており、詳細の説明は省略する。

自治体モデル事業に関する新規の取組として、アクションプランの策定・推進体制の構築を掲げており、今日の議論はSDGs未来都市の取組としても反映されていくこととなる。その他、循環型社会モデルの構築として、再生可能エネルギー、フードネットワーク（子供の貧困とフードロスで事業展開）、EVカーシェアリングの取組を進める。

アクションプラン及びプラットフォームについては、沖縄SDGs推進プラットフォームの中にステークホルダーのプラットフォームを構築し、県と連携して大きな

プラットフォームを作る。様々ステークホルダーのSDGsの取り組む方向性をアクションプランとして設定し、アクションプランに基づいて経済・社会・環境の様々な取り組みとして展開しくことで、自立的循環の創出や誰一人取り残さない社会を実現する方向である。「みんなで作っていく」「みんなで推進する」アクションプランを策定していかたいと考えている。

その様な各ステークホルダーの活動を促進するため、プラットフォームのサポート機能を検討し、来年度から具体化して立ち上げていく方向。

加えて、インセンティブとしての認証制度については、金融スキームと連動も含め経済の加速的な取り組みも含めて検討を進めていくことが今年度の新しい取り組みとして沖縄県SDGs未来都市計画に位置づけている。

## (2) 実施指針の素案について ※スライド27より

実施指針（素案）については、万国津梁会議の最終提言書をベースに作成。県民と一緒に目指すSDGs推進の指針。市町村への公開とパブリックコメントを実施中（8月20日締め切り）であり、加えて、本日のアドバイザリボードの意見も反映した形で9月を目処に実施指針を策定である。

その後、実施指針を踏まえアクションプランの策定作業を進めていく。

（一時的に実施指針素案に画面共有を切り替え）

（4ページ）実施指針のポイントですが、新型コロナウイルス感染症の対応は最終提言書でかなりボリュームを持ってまとめて頂いた。実施指針を取りまとめるにあたりコンパクトさせて頂いた。

（10ページ）普遍性・包摂性・統合性・透明性・説明責任の基本5原則の記述を加えた。インセンティブの設計：アワードの設計・認証制度・金融スキーム等を検討。順次様々な意見を取り入れていく。

（13ページ）ステークホルダーの役割：提言書から参画が促されるような形で表現を工夫。全体的に「期待される」と読みやすくなるよう記載した。

（17ページ）普及啓発の取り組み：最終提言の後に新たな取り組みがあったため、最新情報を反映して整理。

（36ページ）用語集を整理している。方言の説明も記載している。

素案に対する意見は後日意見を集約する様式を送付する予定であり、詳細な修文などの意見をご提出頂く形で進めさせていただきたい。

(会議資料に戻る)

(3) アクションプランの策定作業について ※スライド25より

県が県民とともに目指す沖縄らしいSDGsの目標、モニタリング指標として整理。出来るだけ多くの県民の皆さんに参加して頂けるように分かりやすい目標設定、可能な限り数値目標も設定とチャレンジしていきたい。アンケートやパブリックコメント、ヒアリングなど様々な意見集約を組み合わせる。専門部会・ステークホルダー会議を立ち上げて進めていくこととしている。アドバイザリボード会議の意見を取り入れながら進めていきたい。

スケジュールについては、9月に実施指針を策定、10月頃からアンケート調査の実施、骨子・素案と段階を持って進めていく。アドバイザリボードの開催は具体的な日程は未確定だが、作業の段階毎に委員へ情報提供し意見を伺いながら進めていく。

検討体制について説明する。SDGs専門部会体制については、12の優先課題ごとに委員会を作るという提言があったが、具体的に議論を充実させ進めていくため、さらに統合的な議論もできるように5つの専門部会を立ち上げ、分野横断的な視点も持ちながら進めていくこととしている。それぞれ委員は6名程度を想定。パブリックコメント・アンケート等の意見も集約し、アドバイザリボードの意見も活かしながら進めていく。

検討作業イメージ①を説明する。2030年目指したい姿を分かりやすい箇条書きの目標として設定していく。例えば「カーボンニュートラル社会が実現している」と目指す姿が分かるよう、アンケートや意見をもとに整理していく。これをもとにゴール・ターゲットを整理。これができるアクション・活動指標へ繋がる。県庁だけでなく様々な主体(企業や団体など)を想定、フォローアップしていく。合わせて指標を定めず具体的な行動を呼びかける枠組みがあっても良いかと考えている。これらは全てイメージとしてまとめたものであり、議論を進めていきたい。

吹き出しの検討のポイントを説明する。

- ・企業団体県民をどう取り込んで整理していくか、新しい取り組みなので議論しながら進めている。

- ・達成指標、成果指標、活動指標を全て設定していくのは難しい項目もあるため、できるところから進めていくことも必要かと考えている。

- ・ステークホルダー、活動指標やフォローアップをセットにすると敷居が高く感じられる可能性もあるが、もっと多くの人がSDGsに参画するという視点も必要かと議論している。

- ・来年度以降のステークホルダーのプラットフォームを立ち上げていこうと議論しているが、参画される団体の取り組みを来年度以降増やしていくこともありえるかと考えている。

これらが本日の議論のポイントになると考えており、提示させていただいた。

検討作業のイメージ②を説明する。

想定される作業の段取りについては、

- ・インプットのためのアンケート
- ・情報集約
- ・骨子を作る
- ・目指したい姿の整理、達成指標の整理
- ・上記をもとに意見聴取・アンケート・ヒアリングをして素案につなげる
- ・並行して作業部会・専門部会でも議論、活動指標を整理
- ・最終的にパブリックコメントも重ねて案としていく

委員には全体を通じてご意見を随時いただきたいと考えている。

（玉城座長）

皆様から意見を頂きたい。論点は2つあると思う。実施指針・素案についての意見、アクションプラン策定プロセスに対する見直し意見、アクションプラン策定にあたって重要な視点の助言になる。素案は非常に長く一字一句丁寧には難しいため、これはというのがあればご意見を頂き、全体としては会議を終わったあとに県庁からの意見書の集約をしてもらう。今しかできないことに焦点を合わせたい。

（島袋委員より）

昨年同様、チャットワークの活用を前提としてみてはどうか。

（玉城座長より）

進め方・方法論は最後にどういう風に進めていくか議案としてあげる形でよいか。事務局でも可能かどうか検討して頂く。

（蟹江委員より）

知事も参加されているので提案したい。政府では基本法を作ろうという話が進んでいる。それに先行して沖縄県では指針だけでなく法的な裏付けや条例化を検討し、議会でも議論していただき法的なフレームワーク化ができないか。県全体での広がりもできるし国へも提言できる土台・基盤も作れるようになるのではないか。SDGsは法律を作ってはいけないと言っているわけでは全くないので事例を作って頂く検討をお願いしたい。

（玉城座長）

後程、知事からコメントをいただく。

(島袋委員)

目標17のパートナーのところは、コミュニティーの形成/地域社会のつながりの強化もテーマだが、その部分が弱いと感じる。沖縄は「ゆいまーる」と言われるが特に中南部は地域社会で支え合うという文化がなくなりつつある。自治会の加入率は西日本で最低、那覇市は20%いかない。その部分があまり見当たらないのが気になる。大学の目標としても「目標17」は最重要なところと指定されている。もっと重視した方が良いのではないか。

(玉城座長)

35ページの記載で、グローバルに力が入りすぎていてローカルが足りない、ということと理解。まずはその方向で進めていくという良いか。→異議なし。

よろしければ島袋先生の助言も頂きながらまずは次の会議までに沖縄側の委員で意見を合わせて準備する。言葉を詰めて次の会議に検討で良いか。→異議なし。

(佐野委員)

事務局から説明があった4ページの新型コロナの対応：万国津梁会議の時はコロナ禍においてSDGsの優先順位は低いと思われたいよう、寧ろSDGsを推進していくことが大切という意味を込めて書いた。文章が多い少ないは本質的な問題ではないが、実際にコロナ禍によるダメージが沖縄では非常に大きいと、県外に出て改めて感じている。「Build back better」はまさに沖縄にとって必要なこと。ここにそのメッセージを残したく、加筆を行いたい。

(玉城座長)

佐野委員の意見について全委員の意見を確認。Build back betterやレジリエンスという視点からも書き加えていく。佐野委員にてまとめて頂き、みなさんと揉んでいく。

(淵辺委員)

アクションプランを作った後の行動こそが大事。2030年为目标だがあつという間であり、細かくやっていかないと限られた時間の中でできないことが出てくる。企業がどこから取り組むか、何ができるか、しっかり分かるようにしたい。大変貴重な段階になっている。アクションプランの後のPDCAがあるならわかりやすく書き込んで頂きたい。

(玉城座長)

昨年までの流れとしてはPDCAサイクルやアクションプランを作り込む前に「私たちが目指す社会ってどういうことだろうか」「沖縄らしいSDGsってなんだろう？」を議論した。それを踏まえてアドバイザリボードが誕生した。私たちメン

バーが例えば環境の数値目標を掲げていく上で専門性が足りない、そのために数値目標を作るにあたり今年に専門部会を作ってそこから作り込んでいく。という流れになっていると理解している。

（淵辺委員）

ぜひその後もきちんと作るということであるかの確認である。

（玉城座長）

アクションプランと数値目標をアドバイザーボードというより専門部会で作っていくという流れになっている。

（和田委員）

アクションプランについては優先課題12個に対して指標を設定するとある。一方で、15ページのステークホルダーに「期待される目標」とあるがステークホルダーだけでは達成できない目標が出てくる。例えば、若者が意見参画の場に参加することが必要とあるが、若者だけでは達成できることではない。アクションプランの範囲が分からないが、ステークホルダーの参画についてもある程度進捗を管理また記録していくような仕組みもしくはそれを後押しするための政策の基盤があると良いと思う。

（玉城座長）

まさにその点について昨年平本委員が活発に議論されていた。「声なき声」若者・女性・外国人等、ここに来られない人の声をどう反映していくか。とても難しい問題だがそこを私たちが諦めない/やめない、どういう風に行けるのか。ステークホルダー会議と呼ぶのか専門部会と呼ぶのか分からないが意見聴取の場をなるべく開いていくことをアクションプランの中に位置付けている。指針に関しては具体的にこの方々というところまでは去年リーチできなかったがまずは「参画を約束します」ということを約束した紙になっている。

（平本委員）

別の視点で一点説明を加える。沖縄県は未来都市に選ばれたのでこれから計画を実行していく。既に計画の中に2023年までに達成すべき目標と指標、2030年までに達成すべき目標と指標がきちんと提示されている。この目標・指標の達成に向けた取り組みは県が強いイニシアチブとリーダーシップを取って進めて行かなくてはならない。他方で、実施指針に沿ったアクションプランは「みんなで作って」「みんなで達成していく」。この2つを実施していく上で、2つが混ざってしまうと運営上複雑になってしまうということが、実際に未来都市に選ばれた都市で起きている。この2種類を最初の段階から明確に分けて県の方でリーダーシップをとって進めていくものだという定義をしっかりと活動を進めていく方が良い

のではと思っている。

(知事)

1回目のアドバイザリーボード会議からたくさん参考にしたい意見がたくさんでている。蟹江委員からあった条例の提案については、目標も見据えつつ議員のみならずにも「沖縄らしいSDGs」についての議論を深めて頂きたいし、我々も積極的に議員の皆さんと条例化も含めた検討・研究を重ねていきたいと考えている。物事はまず基本法・理念法ができて、実施法ができるのが自然の流れ。一緒に方向性の基盤を作れるように取り組んでいきたい。途中退席で申し訳ない。

(北村委員)

背景も十分理解できていないところもあるが非常に練り上げたものが作られているという印象。12の優先課題を設定することが良い。総花的ではなくメリハリつけて「沖縄にとって重要なのはこれ」というのを明確に打ち出して、1つの課題だけでなく複数の課題にグルーピングして紐づけたのがとても良い。ただ同時にグルーピングをする中でSDGsの限界にも気づかれたのではと個人的に想像している。どうしても紐付けをして満足しがちだが17の課題ではカバーしきれないところがたくさんある。例えばSDGsに文化の目標がないのはユネスコを中心に非常に議論になったところでもある。17の目標にないことも実は沖縄として課題設定されているが、もっと「こういうことも大事」としっかり打ち出しても良いのでは。17になんとか紐づけるのではなくbeyond SDGsというメッセージを伝える重要な機会にもなる。当然17は17で大切だがもっとこういうことも議論していこうということを出すと、もっと沖縄らしい議論ができるのではないか。

(玉城座長)

平本委員、蟹江委員のお二人から、昨年「もっと沖縄らしく」「もっと沖縄の言葉を使って」まさにbeyondもっと特化しても良いのではという議論が活発化した。個人的にも18に「しまくとぅば」を入れてよかったのでは、と思っているくらいだが、まずは沖縄にSDGsを定着させるため17に縛られているというよりは、まずは基礎をやってみよう、ということでこの素案になっている。その上でアクションプランをやりながら地域の皆様と意見交換をして自分たちのものになっていく中で次が見えてくる。今はまだ途中段階にある。

(玉城座長)

アクションプランの議論に既に入っているが、県からの説明にもあったとおり「分かりやすい目標を設定する」「専門部会をどのように決めていくのか」、平本委員からも「若者ならこういう団体」と県から指し示していく方がいいのでは、と意見があったが、そこも含めてアドバイザリーボードが意見を出していく場だと考えている。他県の事例があれば、若者がどう意見を出しているか、ご意見あればお願いしたい。

(淵辺委員)

SDGs委員会を経済同友会で立ち上げた。10月に横浜のSDGsデザインセンターの視察に行く予定。民間と行政機関をコネクトするという、未来都市として選定された中でモデル事業。横浜のような事例を参考にするのもよいのではないか。また事業所・経済という立場でいうと200団体参画しているというが、もうちょっと経済界・団体をまとめて周知をさせる、取り組みに参画させる方法があっても良いのではないか。民間セクターと一括りにされているが、経済団体・事業所が「自分たちはここ・この分野で活動する」とわかるようになると良い。中間の場としてプラットフォームをどう作るか非常に重要。幅広く考えながらやっていただきたい。

(玉城座長)

経済界に向けての周知活動ももう少ししっかり、例えば教育業界には指定校という位置付けあるように経済界に向けた発信の必要があるのでは、という点。県外のプラットフォームの視察の後にぜひご共有頂ければありがたい。

(島袋委員)

横浜市のSDGsデザインセンターは私達が提案したステークホルダープラットフォームのモデルや源泉としてイメージしたもの。目標設定と指標設定は大変。ステークホルダープラットフォームの中で目標設定と指標設定ができないか。それが可能になるとステークホルダープラットフォームがPDCAをまわしていく芯として動き出すのではないか。SDGsステークホルダープラットフォームをある程度作り込みながらそこで仕事を与えて目標設定等を行ってみる、というのはハードルが高いか。

(玉城座長)

県の説明だとSDGs専門部会および各地域での意見集約やパブリックコメント、イベント等でアンケートなどを行って数値目標を決めながら、次年度以降プラットフォームになっていくのではという意見だったが、それを今年度から同時並行で行っていくというイメージか。

(島袋委員)

作業部会を出した案をプラスアルファしてステークホルダープラットフォームの中でも議論していく。作業部会は人数が限られている。広く開かれた会議の場を設定するとしたらステークホルダープラットフォームが良いのでは。別になにかしら県民円卓会議を開くのは大変なので、常設のプラットフォームで県SDGsパートナーだけでなくどんな人でも参加できる場にして意見を聞いていくというシス

テムを作り込んでいく。これを並行すると良いのでは。

（北村委員）

島袋委員の話に関連するのかもしれないが、目標を数値設定する時にinput/outputばかり見てしまうがプロセスもしっかり見ないといけない。何か数値設定するとこれだけのinputしましょう、これだけのoutputをしましょうというのがあるが、実はその間でなにをしてきたのか、というのがSDGsですごく大事。同時並行的にいろんな人が議論していくというのもSDGsとしては非常に重要。SDGs実現に向けてのプロセスは、そのプロセスそのものも評価の対象になるし、意味があるので、島袋委員の意見はとても大切。島袋委員の意見を聞く前からOutputだけに目を向けずにプロセスを大切にすべき、と提案しようと思っていたが、まさにそういう議論そのものがSDGsの取り組みとして大切と位置付けることができるのではないか。

（玉城座長）

ゴールを決め過ぎずにみんなが議論を重ねていくのが大切では、というのは昨年北村委員/蟹江委員からもあった。答えありきではないプロセスが非常に大事では、という意見があった。

今の議論では、専門部会とステークホルダープラットフォームの位置づけが違って、もっと議論を重ねていける・プロセスを可視化して皆が学びあえるような場を作った方がいいのではという意見が出てきている。具体的な答えを今選んでいるのではなく、どんどん意見を出していく形でよろしいか。→事務局了承

（佐野委員）

万国津梁会議でも、プラットフォームのイメージはあっても実際に形にして動かしていくのは難しく、他の自治体も取り組んでいるが、みんな試行錯誤しているという議論をした。これからアクションプランを作るが、アクションプランもliving documentとして、モニタリングして内容が変わっていくことが想定される。その中で、プラットフォームができるのを待ってそこでアクションプランを作るための議論を行うのか、まずは専門部会でアクションプランを作って進めながらプラットフォームの意見・議論を取り込んでいくのか。ある程度ものがないと動けないのも事実であり、どちらで進めていくかという方針はあった方が良く思う。専門部会にプラットフォームの構成員になるであろうグループの代表が入り、専門部会の議論にある程度、プラットフォームの意見が入っていくことを担保するなど、意見の取り込みという重要なポイントを押さえることが大事なのではないか。

（蟹江委員）

難しい議論ではあるが、プラットフォームの中でアクションプラン、具体的なタ

ターゲットや目標数値を議論し始めてしまうと、もしかするとプラットフォームの役割はそういうものだとみなさんに捉われてしまう可能性がある。プラットフォームはいろんな人が集まっていてマッチングしたり、実際のアクションについて話したりする場だと思うので、いきなり具体的な目標値などを考える場とすると誤解が生じる恐れがあるのが気になる。最初島袋委員の意見を聞いた時は同時並行も良いなと思ったが、みなさんの意見を聞いていくうちにそういった誤解が生じる可能性を感じた。プラットフォームとは別でアクションプランなどを考えていく場を作る方が良いのではと。自分たちの生活とあまり関係ないところで議論が進められている、という印象を持ちがちで、それもふまえて分ける方が良いのではないかと思っている。専門部会などから意見をききながら「何ができるか」ではなく「何をやらなくてはいけないか」という議論を専門部会で揉んでからステークホルダーの意見を取り入れるとやる方が遠慮なく議論ができるのでは。可能なところからやっていくで良いのか、という事務局からの投げかけについては、それが良いと思う。

(平本委員)

石川県で推進してきた経験からいうと、SDGsに取り組んでいくという機運や意識変容を起こしていく活動と、象徴的なアクションを実行していくための活動、は明確に分けつつも同時並行に進めていくのが良いのではと思う。SDGsは社会全体の変容を促していく取り組みでもある。意識を変え行動を変えていくことは、地に足をつけてしっかり進めていく必要があるとともに、時間がかかることでもあることを理解していないと、形だけの取り組みになってしまう。

意識変容という観点では、今回の実施指針もいろんな観点から理解を促進するためのセミナーなどを開催していくことが有効である。そうすれば、実施指針の受け止め方や理解にも多様性が生まれ、これまでの社会とは違う新しい社会が見えるようになる。その段階に来て初めてじっくりくるアクションプランを皆で考えられるようになる。多くの方を巻き込みながら参加を促していくために、時間をかけて変容を起こしていくことを重視して進めていきたい。

一方で沖縄に必要な変容とは何か、を示すためには象徴的な取り組みが必要である。これは県として内閣府に目標値と指標を提示している未来都市計画があてはまる。未来都市計画は毎年結果を公表していくことになる。そのため、これを象徴的なプログラムとして進めていくことを、例えば専門部会の力を借りながら推し進めていくことが望ましい。計画は既に決まっていることなので、どのように進めていくのかを議論していけば良い。

意識変容を起こしながら進めるものと、既に決まった計画を象徴的な取り組みとして進めていくもの、といった時間軸が違うものを2つ同時に進めていく、ということも明らかにした上で進めていくことが望ましい。

。

(和田委員)

アクションプランを作るのに若者や学生がどう参加できるか。若者の意見を集める時に団体or個人に声をかけるかという話もあったが、個人でアンケートでは興味があると答えたものの、どうしていいかわからない若者も多い。意識が高い団体もあるが個人でも意識が高い若者はたくさんいる。特に地方においては、具体的なアクションへ繋がる機会が少ない印象がある。Zoomやオンラインツールも使いながらあぶれてしまった意見をどうやって拾っていくかを今後考えられたらよい。

(玉城座長)

残り5分ほどとなった。非常に多忙なみなさんなので会議も限られているので島袋委員よりSNSも活用していくのはどうか、とあった。事務局として可能か。

(事務局)

チャットワークでの環境は県・事務局にて準備ができるので、活用いただけるなら準備をする。

(玉城座長より)

この点に関してもアンケート形式でみなさまに情報を流して意見を集約して進めていく。まだ足りないが時間となったので終了する。

(事務局)

活発な議論を頂き感謝する。本日いただいた内容を事務局内で検討していく。本日の議事について、議事録又は議事概要のどちらかをまとめるが、昨年度と同様に議事概要としてまとめる形が良いか。→異議なし  
議事概要をまとめ、委員に確認をいただいた後、本日の資料とともに県のHPに掲載させていただく。これで会議を閉会する。